

---

# 雨

文目査

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨

### 【Nコード】

N7720M

### 【作者名】

文目杳

### 【あらすじ】

雨粒が一つ地面に落ちた。また一つ地面に落ちた。幾らか続き地面は陰々滅滅と塗り替えられる。人々は傘を差し、彼もまた傘を天に仰ぐ。そして、雨は世界を蔽ってしまった。

空から降ってくる雨粒が差した傘に心地の良い音を立てる。其の音からその雫は四方に散ってしまったのだろう。そして、また一つ粒が傘の上で弾ける。幾つもの粒が傘で踊り、恰も其れが足跡のように轟々と鳴り響いた。人混みの渦中にいる彼は、彼らもまた雑踏の内にいるのだな、と感じた。

彼は雨の淫靡に誘惑された。丸で世界を塗り替えたような錯覚を覚えたのだ。雨の匂いが馥郁と薫る。湿っていて何処か蠱惑的な匂い。それは咽頭を焼きつける排気瓦斯にも思えた。そして、視界も霧に覆われ曖昧となる。霧に電光が当たり明瞭に映す。其れが白を基として絢爛豪華に視界を漂う。其れが丸で都会を動かす瓦斯ガスファルトの様に見えた。また、音も然様な空気から決して、日が地瀝青を焼く時のような快活な雑踏ではない。寧ろ、人の話し声は一切排斥され、そこには水溜りを叩き付ける音しか聞こえていない様であった。彼はそんな何時も見ている都会でありながら今まで訪れた事のない異国に足を向けた様に錯覚した。

彼の其の莫迦げた空想を加速させていたのは傘だ。雨の日に傘を差さない者はいないだろう。多くの者は其の布で顔を隠す。其処から認知出来るものは鼻と口のみである。其れは布に蔽われたからでもあるが、異常な空気が彼らに目を見せなくしたのかも知れない。人の目が窺えないことは非常に不気味である。目とは人間が最も情報を収集している半面、情報を発信しているのかもしれない。口と鼻も人々を特徴付けるだろう。併し、目ほど人を明確に表すものではない。「目は口ほど物を言う」とはよく云ったものだ。彼は諧謔を燻らせる。

そして、彼の元に其の盲目が曖昧の波をよせる。丸で人が人でない感覚にとらわれる。彼は其れを一つの無機物に認識した。そして、世界は丸でそれ一つ一つを部品として、一つの機械を形成している

様に錯覚する。静寂な隱微が人を物へと変えた。人々は部品で世界は機械である。しかし、人々の動く様は恰も機械であつた。彼は考え直す。人々は機械で、世界は雨に依つて工場に設えられた。

彼は鉄の幹と布の葉で出来た木の生茂る森を逍遙していた。いや、彼の目の前に機械が横切る様が彼にその工場を逍遙している気にさせた。そして、其々が交錯する姿は、乱雑に見えて、或る一つの方角に向かい進んでいる様に見えた。

彼の目の前に信号が現れる。信号は赤を示した。その色は人々の足を止め、その瞬間彼の目の前に一筋の光が横切つた。光沢に満ちた体軀だ。そして、その流れ星はまた一つ煌めき、幾許も繰り返し、流星群を作り上げた。彼の眼には、その遠心分離の如き様相が原動機の反復に映つた。

信号は赤から緑にも青にも見える色を示す。霧を照らす色も変わった。それが丸で撃鉄を引いた際の硝煙に見えた。その刹那、機械は動き出す。靴が水溜りを踏む音が彼の耳に木霊する。機械の起動音だ。機械は今全身を用いて機械として働いている。彼は傘ごしの皮を見つめながらそう思った。

彼は或る男に出会う。その男は雨が傘を叩きつける中、一人だけ雨合羽を羽織つていた。傘の鈴生りの中、彼だけ異質な姿をしていた。雨合羽を羽織る姿は決して様に成るものではない。レインコートは其の字の如く恰も衣服の役割をしているように人々の目に映るからだ。つまり、レインコートを身に纏う姿は雨に濡れた様に思わせる。併し、その男の振舞い、其の湿つた瓦斯が漂う鉄骨と布で取り繕われた森を闊歩する姿は、彼の目にはそう映らなかつた。その男は恰も巨大な困難に立ち向かう英雄の様に見えた。その男は恰も霧にも瓦斯にも見えるものの中で只管真実を模索する推理小説の主人公に見えた。その男は恰も色褪せ、無機質な被造物の散乱した世界を逍遙するように思えた。その姿は濡れた靴が水溜りを踏みつける音と共に彼の背から消えていった。

彼は或る事に気が付いた。この機械の世界に於いて自分が機械で

はないという確証を持ってないということだ。先ほどの男の様に英傑を放つわけでもない。彼の姿は周りの機械と変わらない。もし、自分が機械だとしたら自分は如何すればいいのだろうか。彼は心裡で繰り返した。この世界に於いて機械は如何働くのだろうか。其々が丸で役割を持っているかのように映った目からではその機械の目的が無と思う事は出来なかった。彼は只管その目的を模索した。

鬱蒼とした思考に雨粒が当たる。混濁した空間から開豁な世界へと沈潜する。雨が錯綜から沈静へと押し出す。そして、また思考の惑溺が始まる。彼はその混濁と平静を浮沈する。そして、彼は傘の上でたたたましい足音を立てている雨と共に逍遙する。傘模様の森では雨が水溜りに没入し飛沫を上げる音が響いていた。

(了)

(後書き)

初投稿です。

雨で陰気な気分になった時の楽しみ方(?)を書いてみました。  
雨なので余り明るくないですけど。併し、其れも一興です。  
ただ、夏真っ盛りなのに雨とか季節感無視も甚だしいですね。

彼の役割とは考える事なのではないでしょうか。

雨に依って変わってしまった世界で、混乱と冷静の思考を逍遙しながら只管自分の役割を探すのが彼の役割だと思えます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7720m/>

---

雨

2010年10月10日17時23分発行